

# たかが川柳されど川柳（十六）

上野 一彦

## コロナ禍での新発見

昭和世代といえども、戦後育ちのものは戦争のない素晴らしさと、この歳までなんとか長生きできたことの幸せを感じるべきだと思う。それにしてもウィルスは数多くあれども、今回のコロナほど人々の生活とどうか生活様式に深刻な影響を与えたものはなかったのではないだろうか。コロナ騒ぎの中、「人類の歴史はウィルスとの戦いだっただ」との言葉に、カミュの「ペスト」を再読したくなったのは私ひとりではあるまい。

淡々とした筆遣いの中、様々な人物が登場し、書き手であり、主人公の医師リュウは別にしても、登場人物それぞれ

れの生き方の誰にプロジェクションするかといった思いを抱きつつ興味深く読み終わった。正に「不条理」の中で新生活様式を探る今の私たちにピッタリの作品であった。同時に、歴史の中で変わらぬ相も変らぬ人間の共通した感情と行動に改めて驚きを感じた。ここで一句。

**容赦なくコロナが裁く罪と罰（多年草）**

ロックダウンによる親しい人々との突然の別離と封鎖都市空間という極限状態での人間模様、むしろ精神的変容は、新生活様式を模索する昨今と全く同様で現実味がある。ペストの凄惨な感染容態はコロナの重症症状にも似た鬼気迫

るものがある。ところでコロナはどこに潜んでいるのだろうか。この体験はまさに不条理であり、そうした不条理の中でそれぞれの精神が研ぎ澄まされ、あるいは鈍麻していく様は本当に身につまされた。

**コロナ菌みえるメガネでノーベル賞（多年草）**

どうやらコロナ禍はそう簡単に収束しそうもない。その影響はあと二年とも四年ともいわれる。だとすればコロナとどのように折り合いをつけ、共存していく以外に生き延びる道はなさそうだ。そんな最中、アメリカの大統領選挙が実施される。ここでもコロナは色濃くその影を落とし、全く大統領へのリスペクト感を根底から崩しきった。ご本人がコロナに罹るといふ笑えない一幕もあった。

**民主主義教えた国は今いずこ（多年草）**

そうした選挙結果も気になるところではあったが、やはり世界の良識はまだ生きていたというか、後味の悪さを残しながらバイデンが次期大統領となった。恥を知らない人間がいるということ、そうした人間が核のボタンを持ちうるということの危うさを改めて感じた。やはり世界のリーダーたる大統領らしい大統領を待ち望む人々が多かったということであろう。

そうこうするうち、オリンピックがらみで森喜朗大会会長の女性差別に関する失言騒動があった。東西を問わず困った老人が目立つ。国内における三大失言翁といえ、森・麻生・二階ということになるが、コロナ禍という大きな災禍のなかにあつてマスクも野党もあまり気の利いた対応がしきれないようである。二世議員が跋扈するなか、政治家の質はどんどん低下するようで心もとない。

**アゴを出し総理一人が意地マスク（多年草）**

振り返って自分自身の中にも根本的に変わったところがあったようにも思う。幸運にも日々生かされているという感覚、同時にその日々の中、自分でリズムを作って生きていくという感覚である。もしコロナがなかったら、無自覚に流されたただ老いを重ねていったのではないかとさえ思う。百害あったが一利もあったとあえて思う所以である。

決して収束したわけではなかったが、経済を回すの一言でそれまでの用心はどこに行ったというほどに、右も左も「GOTO」の波に乗った。その性急さゆえにGOTOトランプは数々のGOTOトラブルも生んだ。そうした中で東京外しは、母数をあいまいにした発生数への一喜一憂から、人間の慣れからのトラブルを引き起こす怖さを実証する風潮にすっかり飲み込まれてしまった。自分も実に平

凡な一般大衆の一翼を担っていることをこれほど思い知らされるとは思ってもいなかった。これも悲しい人間の性であり、新発見の一部でもあった。三途の川の渡り賃への適用を頭に「GOTO」にちなむ究極の一句。

**渡り賃割引GOTO天国へ(ばらばらII)**

**尾瀬紀行 久しぶりの草紅葉**

コロナは終息しないのではないかという不安の最中ではあったし、別にGOTOに踊らされたわけでもなかったが、じつと半年自粛自粛で我慢し続けてきた平均年齢七〇歳を超える山の仲間と何度もの中断経験を踏み台に一〇月一日から四日、ついに尾瀬に行くこととなった。結果的には尾瀬の草紅葉を、いやというほど堪能した後、最終日には至仏山にも登った。とはいっても子至仏までだがなんとか行ってくる僥倖に恵まれた。初日は雲一つない快晴、至仏山と燧岳を同時に眺望し、池塘に逆さ景鶴山を見事にとらえ、水面に浮かぶ羊草の紅葉、見事なヤマドリゼンマイの群生、狂い咲きのリュウキンカやエゾリンドウ、行く道々ではズミやマユミなどのかわいい実を随所で見ることができた。

一〇日程前、久々の尾瀬行きの練習と近間の高尾で足慣

夜は相変わらずの病氣自慢に花が咲き、酒量は落ちたものの皆さん本当にお元気であった。その勢いに乗せられたのか、ゆったりとした行程と戸倉のアルカリ温泉が効いたのか、はたまたまにわか治療のテーピングの効果か、あれだけ心配した私の脚も、疲れと張りはあるものの、アキレス腱の痛みも不思議と消えた。久々に再会した尾瀬仲間とは、来年五月の水芭蕉の鑑賞を約束して別れた。

**しづとさの競い合いです同期会(ばらばらII)**

**一読一会**

芥川賞だの直木賞だの必ず読み漁っていた私だが、寄る年波で目が霞むようになってからは読書習慣がすっかり変わってきた。いったんはお気に入りの初版本や心に残るシリーズもの以外は断捨離とばかりすべて放棄した。さっぱりとはしたが今度はひしひしと寂しさが押し寄せ、よせばよいのに新しい書庫の構築とばかり電子図書(Kindle)に手を出した。文字の拡大や図と地の反転など慣れれば思うがまま、こんな便利なものはない。

あらためてあれこれ読み直す時間は人生にあまり残されてはいない。ならば好きな作家の代表作をじっくり再読とか、避けてきた作家とも新たに知己を得ての再発見の旅と

らしをしたとき、ここ数年、持病化している左のアキレス腱を庇いすぎたのか、最後に右の脚が上がらなくなった。何とか家まで帰ったのだが、室内でも歩けなくなり、一晩様子をみてから行きつけの整形外科に行った。診断は右脚の筋肉疲労による坐骨神経への影響と診断された。

これじゃ尾瀬も無理かと思ったが、連日の低周波治療とマッサージ、温浴治療が効いたのか、何とか原状復帰。至仏山は無理でも、大好きな湿原だけならばなんとか心配する家内の飽き果てた目を後に、医者から処方された芍薬甘草湯「ツムラ68」をどっさり携行して出発した。頼りは件の即効性ある漢方薬と習いたてのテーピング、そして山友達の友情だけだった。みんなに迷惑だけはかけまいとのいささか悲壮な覚悟での尾瀬行きでもあった。

**山の音は地球の鼓動息づかい(多年草)**

これが最後はもう口癖だが、なかなかしづといものだ。ゆったりとした行程を幸いに、朝っぱらから習い覚えたテーピングでしつかりアキレス腱からふくらはぎを保護し、相変わらずのいでたちだけは一丁前の山男というわけであった。夏に癌の内視鏡手術した八〇半ばという最年長のガイドの野口さんもりハビリを兼ねての同行だったが快調そのものであった。

か、いろいろな戦略が頭をよぎる。それなりに楽しみつづつ、友を選んでの読書感想の交換なども楽しい時間をつなげてきた。そんな気ままな道楽をしているある時、土居豊氏の『村上春樹で味わう世界の名著』という本に出合った。

「How To」ものや「一〇〇分で名著」的な解説本はあまり好きではないのだが、目次を見ると私の心を知り尽くしているかのような作家や「作品」名が次々と出てくる。米文学、短編好きの春樹ならではのフィッツジェラルドは当然としても、ヘミングウェイ「武器よさらば」、ジョージ・オーウェル「1984」、コナン・ドイル「シャーロックホームズ」ものから漱石の「三四郎」をはじめいくつかの作品、おまけに哲学者ニーチェまで、一〇代で世界の小説を読みつくしたという彼らしいその広さについて手が、いやキーを押す指に力が入ってしまった。

春樹のファンには二種類あるという。「風の歌を聴け」など、「僕」と「鼠」と「羊男」がキーワードの初期の三部作からのファンと、やがて作家として確立した「ノルウェイの森」や「1Q84」(1Q検査の開発が仕事だった私は「1Q84」と当時、見間違っって手に取り、オーウェルをモジった「1Q84」だと買ってから気が付いたというお粗末な思い出付きだが)などの有名な作品に触れてからのファンだという。私と友人のM氏とは、私が羊年、彼

が鼠年という奇遇もあっての前者型のファンである。

『昼の光に、夜の闇の深さがわかるものか』というニチエの言葉が、彼のデビュー作「風の歌を聴け」にあったかどうかさえ忘れていた私だが、改めて村上ワールドに迷い込むことになった。ノーベル賞なんて獲らなくてもいい。私は五歳違いの同じ時代の空気を吸った村上春樹がただ好きなのだ。

またひとつ歳をとったねハルキスト(多年草)

たかが川柳 されど川柳 (二〇二〇年下半年)

(川柳同人「ばらばらⅡ」「多年草」等に発表した拙句を解説付きで載せています。)

七月

ばらばらⅡ 七号

怖いのはコロナじゃないよコロロだよ

◇コロナは怖い、でも極限状態の中で、もっと怖いのは人間の心のような気がする。

極限は心のなかの土手壊す

◇極限状態が続くと、ある日心の土手が決壊しパニックを誘発する。それが人間というものなんです。

しぶとさの競い合いです同期会

◇早起きは三文の得、長生きは□□の得。さて□□にはいるのは?ここまで生きたってことはもつと長生きできるんだよ、は同期会での友人の言葉。

題詠「青」

青春は過ぎ去りし日の片想い

◇青春、朱夏、白秋、玄冬、人生の一巡りのなかほろ苦く青春を懐かしむ日々となった。まるで片思いのような心地である。

青くささ抜ければただのオヤジです

◇そうしてすっかりオヤジになりました。あの青臭さ、小生意気さが今となっては思い出です。

青二才夢駆け抜けて種馬に

◇競争馬は功成り遂げれば種馬としての素晴らしい余生が待っているわけだがそこまでたどり着くのは極めてまれ。

多年草 一三一号

アラートはどこに消えたよコロナいう

◇警戒警戒、まるでオオカミ少年のごとく騒ぐが、結局、政治家の存在競争。これじゃコロナがびっくりするのは。感染の広がりに見るお国柄

◇米国、オーストラリア、ニュージーランド、英国、スウ

エーデン、ブラジル・・・その国のリーダーの考え方、人となりによってコロナ対策は全く違った。馬鹿なリーダーのもとにある国民は不幸であることだけが実証された。

アゴを出し総理一人が意地マスク

◇側近のアドバイザーで全国にあのちんけな「アベノマスク」を配ったわが首相。記念に取っておくことにした。

題詠「期待」

ポックリを願ひ短冊吊るします

◇ピンピンコロリの言葉こそ老人にとってはありがたい「み言葉」。七夕の短冊にもつい記してしまう。

コロナ菌みえるメガネでノーベル賞

◇人類の歴史はウイルスとの闘いであった。なんて初めて知った人は私だけではないだろう。見えない敵は常に恐ろしい。

十分と言いつつなおも期待する

◇「もう結構です」「十分満足しました」口ではそう言っても、実はまだどこかに期待が残っているもの。

八月

川柳柳樽 八月秋田大会

題詠「歌う」

カラオケも少々下手が愛される

◇あんまり上手な人はかえって疎まれる。そんなことも知

怖いもの見たさにスマホクリックす

◇怖いものというかいついっ情報求めてクリックすることは多いものです。便利すぎるとかえって何かが失われるかもしれない。

猫を乗せ走り回るよ掃除ロボ

◇にゃんこブーム。掃除ロボットの怖がるかと思いきや、その後を追いかける好奇心旺盛な猫もいるそうなの。

題詠「発見」

コロナ禍に耐える生き方知りました

◇なんて偉そう。自粛生活が長く続くと確かに耐える良いトレーニングではありますが、何かが壊れていくのではないかとそれが心配。人間には限界というものがあるので。

朝早く古地図片手に江戸散歩

◇本屋で「江戸古地図」という本を手に入れた。道路も景観も変わったが寺社だけはあまり変わらず存在している。そんな古書を片手に、ぶらぶら散歩するのも面白い。

多年草 一三二号

**GOTOは見切り発車でトンネルに**

◇経済を回すとか、自分の支持母体にいい顔したのか、  
やたらGOTOがやかましい。挙句の果てに見通しのきかぬ暗闇トンネルに。

**不要不急まるで貴女はオウムです**

◇某知事、タヌキ顔で「不要不急」と「自粛」の連呼。医療体制の充実とか先にやることがあるだろう。

**やつと夏 セミの抜け殻共鳴す**

◇道端のセミの抜け殻。やつと地上に出たんだね。短い命を燃やし、その抜け殻が夏の暑さに共鳴している。

題詠「やはり」

**経済は生命を越える永田町**

◇こて先に自分の人気だけを考える政治家が永田町、いや永田村には多すぎる。彼らを半分いや1/3に減らしても何の影響もなさそう。

**コロナ禍にアベノマスクは骨董品**

◇あつという間に骨とう品となったアベノマスク。彼のポケットマネーでなくすべて税金。たまらんナー。

**ステイホームやはりあなたは強かった**

◇家で自粛を！標語好きの横文字カタカナ。素直な国民、都民はただただ従い、やつと収束気味。オオカミ少年じゃ

ないのだから何度もやったらだめですよ。

九月

ばらばらII 八号

**お互に諦めきつてよい夫婦**

◇夫婦和合のコツはお互いに過度の期待をせず、あきらめること。こんな簡単なことが何十年も暮らさないとわからんもんです。

**少々の遠慮が友をつなぎとめ**

◇親しきともにも礼儀ありとは言いが、親しければ親しいなりに多生の遠慮というか配慮をすることが究極の友情のコツ。

**いつまでも働けますは脅しです**

◇定年延長、挙句の果てにいつまでも働けますというのは温情でも配慮でもない。藤沢周平の世界にある「致仕」という美しい言葉こそ年寄りには必要。

題詠「山」

**コロナ禍にビデオ撮り溜め山となる**

◇やたらなんでもビデオに取る。いつか見ると思えば安心してなかなか見ずにいつの間にか置き場所に困るほど溜まってしまふ。決してゴミとは言わないが。

**山路を坂とは言わぬ山暮らし**

◇不思議なもので山村では山道を坂とは言わない。上り坂

下り坂。山道も登りと下り。同じように思うのは都会人。

**山場過ぎわかつていたと評論家**

◇評論家というのは賢そうだが困った人種。物事がある程度見えてくると自分にはわかつていたとか、最初からそう思っていたといひますね。

多年草 一三三号

**コロナ禍に唯一黒字は交通費**

◇コロナ生活でふと気づくとスイカが全く減っていないこと。外出しないんだから当たり前だが、なんだか得したように思う小市民。

**天国に西部警察お引越し**

◇渡哲也が亡くなった。いよいよ昭和時代の終焉、いやずつと前に終わってはいるが。代表作西部警察も同時に天国にお引越し。

**君だけが頼りとスマホ握りしめ**

◇日がな一日、気づくとスマホがお友達。家族の前でも触っていて叱られる。でもこいつが私の一番の話し相手なんだもの。スマホ命。

題詠「隅」

**子だくさん廊下の隅に我が書齋**

◇気が付けば、狭い我が家では子供たちの勉強部屋がおやじの書齋に優先。挙句の果てに廊下の隅というか一角に

やつと自分の居場所を見つける。

**タマちゃんは隅の居心地知っている**

◇猫は狭いところが好き。ASD（自閉スペクトラム障害）にも似たところがある。隅っこは安全で居心地がいいらしい。

**窓際も住めば都と空仰ぐ**

◇サラリーマン。いつの間にか窓際に。それはそれなりに「住めば都」と窓際の特権、暇々に空を流れる雲などを楽しむ。

一〇月

多年草 一三四号

**容赦なくコロナが裁く罪と罰**

◇コロナ禍にそれぞれの普段の行状が反映しやすくなることがあるのでは。コロナは何でも知っているというわけ。

**アルプスの少女までもが塾通い**

◇CMにアルプスのハイジやガチャピンが身売りして出てくる。実に大人の商業主義が子供の世界を奪っていく嫌な構図がある。

**長生きは親しき友の送り役**

◇長生きは悲しい。何人親しき友を見送ったことか。最後にだけはなりたくないなーと思う今日この頃。

題詠「吹く」

コロナ禍にケ・セラ・セラ風吹きすぎぶ

◇いつまでも収束しないコロナ禍。なるようにしかならないと「ケ・セラ・セラ」を口ずさむようになる。

収束の兆し希望の風が吹く

◇今となっては一縷の望みは収束の兆し。それが我々に残された最後の希望のひかりなんです。パンドラの箱の最後に残ったのが「希望」だったと昔の人はうまいこと言うね。

男爵はホラ吹きすぎて政治家に

◇現代のほら吹き男爵、それは政治家。平気であそをつく、しらばつくれる、秘書のせいにする。

十一月

ばらばらII 九号

お前の手せめて握って逝きたいな

◇コロナ禍では、病床にあっても最後のひと時もひどい場合は火葬まで家族から引き離される。きつと最期にこんな気持ちになるのでは。

一言の愚痴もこぼさず掃除ロボ

◇わが家が一番の働き者、多少騒音があっても口ごたえひとつせず黙々とよく働く。それはロボット掃除機ルンバ君。わが家では二代目だが、掃太と名がついている。

七人の敵にコロナが加勢する

◇男は鬨を跨げば七人の敵がいる、といわれる。現代はそ

ればかりではない。コロナという強敵が今や虎視眈々と待ち構えている。

題詠「習慣」

一歩引く生き方習い性となり

◇俺が俺がとしやしやり出る時代が終わると、品よく一歩引く生き方が習いせいとなる。これ生き方の極意なり。

食前のダイエツト食欠かせない

◇肥満を気にしているいろいろなダイエツト食にチャレンジする。気が付くと食前か食後にそのダイエツト食を食べている。だから痩せないわけ。

オシッコも座る習慣シツケられ

◇いつの頃からか家では立って小水をするなどといわれる。なんでもTVで便器の周りを立ってすると汚すという番組があつて以来だという。座っておしっこなんて去勢され飼いならされた犬みたい。

多年草 一三五号

ツイッター遠吠えとなり平和くる

◇この季節、往生際の悪いトランプ大統領ものは多そうですが、どうひねるかがなかなかむずかしい。

喜寿迎え小春日にほくそ笑む

◇やつとここまでなんとか来たぜ。「やつたー！」と叫ばずにそつとほくそ笑むところがミソ。

信念と執念の差こそ美学です

◇これもトランプ物でもあるのだけれど、昨今の政治家一般に執念は感じて信念を感じないのは私だけか。

題詠「音」

困ったら心の奥の耳澄ます

◇上句は「悩んだら」でもいいのですが。そんな心境になることありませんか？ついにはそんな耳さえ遠くなり・

山の音は地球の鼓動息づかい

◇壮大な感じがして自分では気に入っています。新型コロナ三密の次が五つの小だつて。こんなちまちましたことしか言わない政治家がふえるなか、自然は雄大ですな。

ジョンガラに秘める憂いのバチ捌き

◇なんだか太三味線の響きは日本人の哀愁の血を掻き立てます。

一二月

多年草一三六号

五つの小 抜けていますよ小手先が

◇小池百合子知事はキャッチフレーズ好き。コロナ禍に三密で味を占め、挙句の果てに五つの小。覚える気もなく、ふとこんな句を口ずさむ。

流行の外で言葉の意味を知る

いろいろな言葉が飛び交います。流行語大賞なんて言っても初めて知る言葉もあるくらい。

孫が言う サンタにマスク届けたい

◇孫がコロナの影響がサンタクロースにもあるのじゃないかと心配して、「サンタさんにもマスクとどけてあげて！」

題詠「望み」

コロナじゃないコロリがぼくの望みです

◇コロナで世を去るのは避けたい。隔離され、家族にも会えずに死ぬなんて。それにしてもびんびんころりは永年の夢ですね。

コロナ菌見えるメガネを売ってくれ

◇コロナコロナと大騒ぎ。ウイルスとはわかっていても見えないところが恐ろしい。もしもコロナ菌が見える眼鏡でも発明されればこれはノーベル賞ものですね。

白米と君のぬか漬があればいい

◇平凡な幸せこそが庶民の願い。だとすれば愛妻の手料理、いや究極の最後の晩餐は、白米と君のぬか漬けというわけ。

白米と君のぬか漬があればいい

◇平凡な幸せこそが庶民の願い。だとすれば愛妻の手料理、いや究極の最後の晩餐は、白米と君のぬか漬けというわけ。

題詠「望み」

白米と君のぬか漬があればいい

題詠「望み」

白米と君のぬか漬があればいい